＜ 編 集 後 記 ＞

2007年（平成19年）最初のセンターニュースをお届けします。本年もどうかよろしくお願いいたします。

林先生の「名古屋大学の安否確認システムについて」では，東海地震に伴う名古屋大学における構成員の安否確認システムについて紹介されています。私事ではありますが，阪神淡路大震災のあった1995年1月，私は大阪大学吹田キャンパスにある蛋白質研究所に勤務しており，吹田市に住んでおりました。成人の日の連休明けの早朝，突然の大地震に飛び起きました。さいわい，吹田市近辺では震度5程度だったので，神戸のような建物の倒壊などはほとんどありませんでした。通勤に使っていた阪急電車は止まってしまい，1時間半ほど歩いて研究所に向かいました。8階建ての研究所のガラス張りの階段のガラスが全部割れ，建物のあちこちに亀裂が生じました。実験室から火が出た研究室もあったそうです。私たちの研究室ではそれほど大きな物的被害は有りませんでしたが，終日片づけに追われました。研究室の構成員の安否は，実際に研究室に出て来ることができた構成員と顔を合わせることで確認できたのがやっとでした。電話連絡は，地震発生直後は可能でしたが，数時間後にはほとんど不通になってしまいました。さいわい，私たちの研究室のメンバーは全員無事でした。その頃広まりつつあったe-mailによる連絡が電話などに比べ有効であったことも伝えられていました。あれから12年。当時に比べると，インターネット，携帯電話などのIT技術が格段に進歩しました。これらを活用することで，少しでも早く安否確認ができ，人的被害を最小限に抑えることができればと願っています。

（Y.F.）